

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

宮廷人と異端者

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 宮廷人と異端者

ライプニッツとスピノザ、そして近代における神

マシュー・スチュアート 著

桜井直文 朝倉友海 訳

書肆心水

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

THE COURTIER AND THE HERETIC  
Leibniz, Spinoza, and the Fate of God in the Modern World

Matthew Stewart

Copyright © 2006 by Matthew Stewart  
Japanese translation rights arranged with  
W. W. Norton & Company  
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

目次

第1章	一六七六年十一月のハーグ	九
第2章	ベントー	一七
第3章	ゴットフリート	四四
第4章	精神の生活	六四
第5章	神の弁護人	九二
第6章	人民の英雄	一八
第7章	ライプニッツの多面性	三六
第8章	友人の友人	五二
第9章	恋するライプニッツ	六七
第10章	事物の全体についての秘密の哲学	九九
第11章	スピノザへの接近	三四
第12章	接 触	五一
第13章	生けるスピノザ	五九
第14章	スピノザ主義への解毒剤	九八
第15章	出没する亡霊	一三〇
第16章	抑圧されたものの回帰	一六一
第17章	ライプニッツの終わり	一八一
第18章	余 波	一九八

原 注	……四三〇	謝 辞	……四二二	訳者あとがき	……四二三
参考文献	……四三八	索 引	……四五九		

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

## 凡例

- 「」内に本文より小さな文字で記したのは、訳者による補足ないし注記である。
- 引用文中の「」内は引用者（著者）自身による補足ないし注記である。
- 原注は、原著では、本文の当該箇所最初の部分を一部引用したうえで付けられているが、本訳書では、慣例に従い、当該箇所の最後の部分に番号をふって示した。したがって、本文における注番号の位置は訳者によるものである。
- 『』は書名、《》は原著においてイタリックで示されている部分である。ただし、原著においてイタリックで示されていても文脈から《》で示すことがかならずしも適当でないとは判断された場合には、その部分を傍点で示した。
- 本文中に挿入された注は、原著者のものは（原注）、訳者によるものは（訳注）と記して区別した。

SAMPLE  
Shoshinshui.com

宮廷  
人と異端者

——  
ライプニッツとスピノザ、  
そして近代における神——

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

キ  
ャ  
サ  
リ  
ン  
と  
ソ  
フ  
ィ  
ア  
に

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 第1章 一六七六年十一月のハーグ

哲学が無害な慰みごとと考えられている時代に生きるわれわれは幸せである。しかし一六七六年の秋が近づくころ、バルフ・デ・スピノザには、わが身の危険を心配する十分な理由があった。一人の友人が最近処刑されていたし、もう一人の友人は獄死していた。主著『エチカ』を出版しようとするかれの努力は、それを犯罪として訴追しようとする脅迫のなかで頓挫していた。あるフランスの指導的な神学者はかれを「今世紀でもっとも不敬虔でもっとも危険な男」と呼び、権力をもつある司教はかれを「鎖につないで鞭打たれるに値する気のふれた邪悪な男」と非難した。公衆にはかれは、たんに「無神論者のユダヤ人」として知られていた。

この不信心な哲学者に裁きを下そうと躍起になっているように見える者たちのなかに、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツという若い宮廷人の博識家がいた。上述のフランスの指導的の神学者に宛てた私信のなかで、かれはスピノザの著作を、「ぞつとする」とか「怖じ気をふるわせる」と形容し、ある著名な大学教授に対しては、それを「許したいほどに恥知らず」と呼び、またある友人に対しては「あきらかに教養があると思われるひとがこのような低きにまで墮落するとは嘆かわしい」と打ち明けていた。

しかし、私的な書齋のなかでは、このライブニッツは、かれのノートにスピノザの著作に対する克明な注釈を書きためていた。そして、この公的な大敵と秘密裏の手紙のやりとりを行い、この大敵に「高名なる博士にして深遠なる哲学者よ」と呼びかけてさえた。さらに、共通の友人たちを介してかれは『エチカ』の手稿をその目でたしかめる機会が与えられることを懇願し、一六七六年十一月十八日かその前後、つ

いにハーグへと旅立ち、スピノザ本人を訪ねたのである。

\*

ライプニッツはヨットでオランダに着いた。三十歳にしてかれは、ヨーロッパにおける最後の万能の天才という名声を獲得しつつあった。かれはすでに、われわれが微積分法と呼んでいる数学的方法を（アイザック・ニュートンに遅れて、しかし、かれは独立に）発見していた。かれは自分の荷物のおかげに算術計算機械を携行していた。歯車と目盛り板がぎっしりと詰まっているその小さな木箱は、今日におけるコンピュータのもっとも古い祖先と言えるだろう。多くの分野にわたるかれの貢献は、すでに長大なリストをつくりつつあった。すなわち、化学、時間測定法、地質学、歴史学、法学、言語学、光学、哲学、自然学、詩学、そして、政治理論といった分野である。ドゥニ・ディドロは『百科全書』のなかでこう書いた。「自分のちっぽけな能力をライプニッツのそれと比べると、自分の本を放り出してどこか暗い部屋の隅っこで静かに死んでしまいたい気持ちになる」と。

ライプニッツはかれのトレードマークのかつらや、豪華な旅行用のコート、それに当時のパリの最新流行ファッションであったアイテムの数々、すなわち、装飾のはいたベスト、膝丈のズボン、それに絹のストッキングなどを身につけていたことだろう。オルレアン公爵夫人はかれについてこう好意的に記した。「学者がよい身なりをして、臭くもなく、冗談を解するというのは、とても珍しいことです」と。かれは小柄で、目につく鼻と、鋭くひとを詮索するような目をしていた。かれの頭は、猫背ぎみの肩より前方に突き出ており、またかれは、自分の腕をどう動かしたらいいかわからないようだった。かれの両足は、まるであの冥土の川の不機嫌な渡し守の老人カロンのように、曲がって不恰好であったと言われている。落葉が散りばめられたハーグの運河を行くボートに揺られ、豪華な衣装が秋の風でばたばたいていた有様は、あたかもエキゾチックな金びかの猛禽のように見えたことだろう。

かれはこういった外見のすべてを、精神の優雅さによって埋め合わせていた。少なくとも同時代人にはそう思えた。あるドイツの男爵はルイ十四世の外相にこう進言している。「外見はつまらない人間のように見えますが、約束したことは実行できる地位にいる男です」と。ライプニッツと会うことは、意識の流れに圧倒されることだった。かれのペンからあふれ出した著作は十五万枚もの紙片になり、それはハノーファのライプニッツ・アルヒーフに所蔵されているが、その全体にはいまだに編集の手が入っていないほどである。しかしかれにはまた、何かとらえどころがないものがあつた。それは、たんに若い男の遍歴願望といったもの以上の、ある落ち着きのなさである。かれのあふれることばを聞いたあとで、それでもまだ何かが語られていないという感じを、かれは聞き手にしばしば残した。ある生意気な王女は言った。「この男は好き。でも、わたしにはなんでもとても表面的に話すので、腹を立てているの」と。

\*

スピノザは、町の北の郊外にあるパフィリユン運河 Pavilioensgracht という運河ぞいの赤レンガの家に住んでいた。ちょっと歩けばそこには、当時のオランダ画家たちによって有名になった平らな、風車のある風景がひろがっていた。かれは四十四歳の誕生日を迎える直前だったが、かれにはあと三ヶ月の命しか残されていなかった。後にかれを有名にしたいくつかの著作はもう完成していた。『神学政治論』によってかれは近代的な世俗の国家の最初の偉大な理論家の一人となり、アメリカ合衆国憲法の起草者たちの先駆となった。『エチカ』においてかれはのちの哲学的・科学的発展を二世紀、ある場合には、三世紀先取りしていた。ヘーゲルはかつて言った。「スピノザ主義者であることは、すべての哲学の本質的な始まりである」と。「神を信じますか」と尋ねられたときのアインシュタインの「スピノザの神を信じます」という答えはよく知られている<sup>12</sup>。

スピノザは平均的な背丈で「均整のとれた体格」であり、「美しい顔立ち」で「感じのいい表情」をして

いたと、幾人かの観察者たちが書き記している。頻繁に咳をすることをのぞいては、健康を害している様子はほとんどなかった。そのオリブ色（黄褐色）の肌、当時の流行にあわせて肩までの長さを整えていた縮れた黒髪、薄い口ひげ、濃く長いアーチ型の眉毛、そして黒くてけだるい瞳から、「外見からすぐにポルトガル系ユダヤ人の血を引いているとわかる」とある評者は記している。

スピノザは親切な画家とそのにぎやかな家族から部屋を借りていた。この一家は、上階に住むこの無神論者と、とてもうまく折り合っていたように見える。かれは、日中は、顕微鏡と望遠鏡に使われるレンズを研磨し、夜中は、蠟燭の光のもとで、かれの形而上学の体系を磨きあげていた。あるときかれは三ヶ月にわたりずっと部屋にこもりきりになり、変な時間に下の階に食事を求めるのみだったという。食事はというと、いつもは干しブドウとミルク粥だった。死後作成された遺産目録によれば、かれは二着のズボンと七枚のシャツ、五枚のハンカチを所有していた。唯一豪華なものといえば、赤いカーテンがついた四柱式ベッドがあったが、それはかれの両親から相続したものだだった。

だがスピノザという人間は、かれの生活様式から示唆されるほど単純ではなかった。友人や訪問者たちはしばしば、かれのなかに非常に謎めいたものを発見した。それは、警戒心と大胆さ、謙虚さと傲慢さ、そして、氷のような論理と反抗的な熱情とが奇妙にも混じり合ったものだった。かれは真の信仰者の性格をもった異端者であり、宗教心なき聖者だった。かれには、生涯にわたる献身をひきおこすようなカリスマがあったが、同時に、敵を作るといふ比類ない才能もあつたのである。

\*

スピノザはこの出来事の記録を残さなかった。あるいは、いずれにしても、かれの遺稿集の編者たちの努力のあとにはそのような記録は残せなかった。その編者たちの一人はたまたま、当時のオランダにおけるライプニッツの連絡係でもあつたのである。そしてライプニッツは、その出来事のあとにかれに残され

ていた四十年間、この出来事を話題にすることを極力避け続けたのである。

問いたただかれるとライプニッツはこう主張した。ハーグを「通過」するとき、哲学者仲間のところらちよつと立ち寄つたのだ、と。そしてこう付け加えた、自分たちは「ほんの何時間か」会っただけで、たんに「当時の時勢をめぐる話題」を交換したにすぎない、と。その旅行で得られたかもしれない哲学について、かれは言った。それはあまりにひどいものなので、「反駁するのに時間を浪費する」つもりもなかった、と。

この説明のどれ一つとして真実ではない。実際は、ライプニッツがハーグに旅行したのは、そこに住んでいるもつとも悪名高い哲学者と会うというまさにその目的のためだった。それにかれは、少なくとも三日間はこの町に滞在した。かれ自身が認めているように、かれはこのホストと「何回もまた長時間にわたって」会話した。時勢に関する社交的な会話の枠を大きく超えて、かれらの議論はあふれ出していった。一片の証拠が、この会談を直接物語るものとして残されている。それは一枚の紙片であつて、その下部に記されているノートによれば、それはライプニッツがスピノザの面前で書き記して読み上げたところのものである。この紙片には、神の存在証明が含まれている。

だが、ハーグにおいて何が起つたかを知るためのもつとも重要な糸口は、ライプニッツの哲学の間間にごそ見出される。かれの未刊の著作を分析することであきららかとなるのは、かれがスピノザを訪ねてきたまさにその数日のうちに、かれの思索の色調と内容が、決定的に変化するということである。それにまた、ハーラントから帰つてから十年後になつてはじめて公にしたかれの形而上学的体系において、スピノザの影響ほど重要かつ問題含みの、奇妙にも両義的で、しかも、一般に認識されていない影響はないのである。

六十歳に近くなりライプニッツはついに、若き日にかれがスピノザに示した関心は、たんに副次的なものではないということを、漏らしてしまつたかのようにである。最終的にはかれが「生前」公刊しないことを

選んだある対話篇において、かれは登場人物に「ご存知のようにわたしはかつてすこし行き過ぎて、スピノザ主義者の側に傾いたことがあった」と語らせている。しかし、この遅ればせの、しかもついには伏せられてしまった告白すら、この哲学者仲間との関係の深さと複雑さおよび時間的な長さを、控えめにしか述べてはいない。実際は、スピノザとの面会は、ライブニッツの人生を決定づける出来事だった。それ以前のすべては、その解決のためにそれを指し示し、それ以後のすべては、その説明のために、そこにもどっていくような、そのような出来事だったのである。

\*

十七世紀は光り輝く時代であり、争いの時代でもあった。すなわち、宗教戦争、内戦、革命、侵略、そして、民族浄化の蛮行に続く霊的覚醒の時代だった。また、国際貿易、世界帝国の形成、そして、主要な首都における急速な都市化の爆発的な成長の時代だった。そしてそうした成長には、伝説的な疫病や大火が不可避的にもなったのである。そして、少なくとも選ばれた少数の者の目には、もはや神がどんな役割も果たさないような、新たな科学の勃興の時代だった。歴史家たちはこの世紀を「天才の世紀」と呼んできた。しかし当時における知識人たちは、概してその時代を比類なく邪悪な時代だととらえていた。十七世紀の生活の、豊穡で複雑なタピストリーをならぬく一本の糸があるとすれば、それはこの時代が、移行の時代であったということである。すなわち、中世における神権政治的秩序が、近代の世俗的な秩序にその座を譲るといふ、移行の時代である。

スピノザは、近代世界を作ったわけではないが、おそらく最初に近代世界をよく観察した人間である。古来の哲学的問題に対して、はっきりと近代の視点から解答を試みた最初の人間である。かれの哲学体系においては、近代科学によってあらわにされた宇宙のすがたに相応しいような神の概念が示されている。それは、いかなる目的も計画もなく、自然法則の原因と結果によってのみ支配されているという宇宙のすがた

たである。自然の中でわれわれが特別な位置を占めているという自負が潰えたあとで、人間であるとはどういうことかをかれは描いてみせた。古い神学がもはや信頼できなくなった時代において、幸福と徳とを見つけた手段をかれは処方してみせた。そしてかれは、その本質において断片的であり多様であるような社会に適合する自由で民主的な政府のシステムを擁護した。かれの哲学体系は、近代に対する肯定的な応答として最初の、そして、原型的な実例である。いいかえれば、今日われわれがおもに世俗的自由主義とつなげて考えているような近代世界の肯定である。

ライプニッツもまた、かれのライバルに劣らず遠目がきき、野心においても負けていなかった。かれもまた、理性の導きに信頼を置き、この信頼がかれをハーグへの旅に赴かせたのだった。しかし、風が吹きすさぶ十一月に会ったこの二人の男は、きわめて異なつたしかたでかれらの時代に属していた。生まれた環境、社会的な地位、個人的な希求、食べ物の嗜好、ファッションのセンス、つまりわれわれが性格と呼ぶところのものを形作る無数の小さなものにおいて、ハノーファの豪華な博識家とハーグの聖なる革命家は、ほとんど完全に正反対だった。かれら二人ほど「性格こそが哲学である」という格言をよく例証しているものはない。

スピノザとの会談の直接的な結果としてと言ってほぼよいのであるが、ライプニッツは近代という時代の挑戦に対するかれ自身の独創的かつ反動的な応答を表現することになった。哲学的著作においてかれは、理性の限界を分析することによって、神と人間についての古い考えをなんとか回復しようとする戦略を表明する。近代がとらえそこなつたすべてのもののなかに、かれは生の意味と目的とを発見できると主張する。かれは、自利を越えた正義と慈善の目標に仕えることと結びついた近代的社会のビジョンを提示する。かれの形而上学体系は、近代への反動的な応答のパラダイムである。つまり、今日われわれが主に宗教的保守主義と結びつけているところのものである。

もっとも広く受け入れられている哲学史において、スピノザとライプニッツは、とうの昔にアカデミッ

クな進歩のなかで克服されてしまった思弁的な形而上学的企図として理解されている。<sup>原注</sup>しかし実際は、出来事をより広い視点から見ると、十七世紀のもっとも偉大なこの二人の哲学者は、いまだ乗り越えられてはおらず、おそらくは、近代思想の双子の創始者と見なされるべきなのである。われわれは、スピノザおよびかれがみずからの哲学のなかに記したすべてに對する反動によつて定義される時代に生きている。そして、オランダから歸つてのち長い年月をかけてライプニッツが発展させた哲学ほど、この反動を説得的に表現しているものはない。たんに少数の例をあげるなら、国家と教会の分離、文明の衝突、自然淘汰などをめぐる現代の論争はすべて、この一六七六年十一月に始まった議論の続きなのである。今日においてもなお、ハーグで会つた二人の男は、われわれ全員が選ばねばならない、また、すでに暗黙のうちを選んでしまつてゐる選択肢を、表してゐるのである。

(原注) この書物で示されている見方は、近年の多数の専門家による研究成果に多くを負つてゐる。同時にまた、ライプニッツ、スピノザ、かれらの関係、そして、近代思想に對するその意義をめぐる結論のいくつかは、異論を呼ばないわけではない。しかし、本書の主題から焦点を逸らさないために、二次文献についてのほとんどすべての議論は本書末尾における「解釈をめぐるノート」へとまわされてゐる。

SAMPLE  
Shoshi-  
mirshi.com

## 第2章 ベントー

哲学者たちのあいだでも、第一印象は大切である。スピノザの出自とかれをとりまく状況についてのつぎの三つの事実が、かれがライプニッツに与えた衝撃を理解するのに重要である。第一は、かれがユダヤ人だったということである。第二は、二十四歳のときに異端的な見解のゆえにユダヤ人コミュニティーからかれが追放されたということである。第三は、かれがオランダ共和国の黄金時代に生まれ、そしてその時代を生きたということである。まだ中世的な考えにとらわれていた同時代人にとって、スピノザはその血統からして異星人だった。ある憤慨した神学者に言わせれば、「われらの愛するホーラントが生み出すような類の怪物」だった。現「近代の観察者にとっては、若き日のスピノザの物語は、「そうした怪物のイメージより」むしろ、ある飛び抜けた個人のイメージ、すなわち、歴史を変えることのできるような人間というイメージを例証するのによりふさわしいものである。しかし、「中世と近代という」二つの時代のはざまに永遠にとらわれていたライプニッツにとっては、スピノザはその両方であつたらう。すなわち、怪物であるとともに世界的な人物でもあつたらう。ここにこそ、かれらの会談の進行と、その後のライプニッツの哲学の展開を決定することになる問題がよこたわっていたのである。

バルフ・デ・スピノザは一六三二年十一月二十四日にアムステルダムに生まれた。かれにつけられた名前 Baruch はヘブライ語で「祝福されたもの」を意味する。この男の子は家庭では、それに相当するポルトガル語でベントー Bento と呼ばれていた。後には、学問的な目的から、かれはベネディクトゥス Benedictus というラテン名を使った。遺稿集では、すでに悪名高いものとなっていた B D S というイニシャルによつ